第２回我孫子市布佐中学校区の学校の在り方検討委員会　議事録

開催日時　令和４年12月19日　午前10時から正午まで
会　　場　我孫子市水道局大会議室
出 席 者　委員10名（２名欠席）、事務局11名　（傍聴人５人（上限））

【本議事録の表記に関して】
　議事中に出てくる学校名等について、次のとおり略記する。
布佐小学校：布小
布佐南小学校：南小
布佐中学校：布中
布佐小学校、布佐南小学校、布佐中学校の総称：三校

１　開会

（省略）

２　教育長あいさつ

（委員への謝辞省略）
　コロナの感染状況は、９月は市内19校で一日に90名程欠席していたが、10月11月と減ってきて一桁台になっていた。しかし、第８波があり、先週末の12月16日には市内で120名の陽性者が出ている。
　給食が黙食となり、学校を預かる者としてこのような状況をどうにかしてあげたいと思っている。市で実施している学級満足度調査では、孤立感を覚える子どもが増えてきており、コロナも要因として考えられる。黙食ではなく、コミュニケーションをとったり、適切にマスクを外せる状況を作ったりしていければと思っている。
　７月25日開催の第１回検討委員会では、これまでの経緯や個別施設計画、小中一貫教育などについてご説明し、ご意見を伺った。今回は、11月18日の市川市立塩浜学園（以下、塩浜学園）の視察報告や、学校施設形態と小中一貫教育の関係についてご説明するので、視察の感想や忌憚のないご意見を伺いたい。
　今後は現状把握のために、布佐中学校区三校の視察を行いたいと思っている。その後、第１回検討委員会でお話しした、３つのパターンについて本格的な協議をしてい

ただきたいと考えている。その中で、他事例の視察や議事進行について要望があれば事務局にあげていただきたい。

３　市川市立塩浜学園視察報告　（学校教育課）

４　施設形態と小中一貫教育について　（指導課）

（ともに別紙資料参照）

５　事務局資料についての質疑応答、協議、検討

（委員）視察不参加のため、いくつか質問する。塩浜学園は中学校段階から学区が広がり他地域の小学校の児童も多数進学してくるが　①なぜその形式になっているのか。②中学校からの合流による課題はあるのか。　③平成27年の開校時点と翌年の法整備による義務教育学校への転換について詳細は。

（指導課）①について、塩浜学園の学区はマンションの集合地域になっており、前身となる塩浜小学校、塩浜中学校の子どもが主だった。義務教育学校になったことで、学区が整理され、隣接する南行徳中学校区からも一部塩浜学園へ進学することになったが、南行徳中学校進学の他の児童からも「少し距離が延びても塩浜学園に通いたい」という希望が多くあり、結果として中学校から合流する児童が多い形式になった。

②について、義務教育学校の前期課程・後期課程は、それぞれ小学校・中学校の学習指導要領に沿った教育をしており、後期課程（中学校段階）から合流しても学習の進度に違いはない。また、塩浜学園の独自教科（塩浜ふるさと防災科）についても、総合的な学習の時間を置き換えているため、問題はないと聞いている。

③について、平成27年時点では、おそらく運用上の施設一体型小中一貫教育を行っていたと思われる。

（委員）将来的に、布小と布中が施設一体型、南小が分離型としてスタートし、その後に南小が一体型へ編入するということは可能か。

（学校教育課長）制度上は可能だが、その際は改めて時間をかけて検討し、地域や保護者の理解を得てから編入ということになると思われる。

（委員）私は三校一体型がよいと思う。南小は生徒数が減少し、増える見込みがない。建物も老朽化していて、１から建て直す際にも一体型にするメリットがある。不登校対応など子どもたちの教育のためにもなると思う。

（委員）一体型にはメリットも多く良いことだと思うが、そこに至るまでにもっと議論をしなければいけない。南小の保護者に聞いても今の小さな学校で困ってない、もっと深く接してほしいという。また、一体型になった際、職員負担が増えることも心配している。

（学校教育課長）教職員の配置人数について、県の基準が示されており、学級数を元に配置することになる。二つの単学級小学校が合わさって２学級になれば、２学級の学校として配置される。義務教育学校の後期課程についても、中学校の基準で配置されるため、義務教育学校全体での学級数ではなく、前期課程と後期課程それぞれ小学校、中学校の基準で配置される。ただし、教頭や養護教諭については、前期後期で各１人、計２人ずつという配置になる。

また、具体的な人数は明記されていないが、義務教育学校へ移行したことによる業務増加を勘案し、加配教職員をつけるという制度もある。

（委員長）制度はあるが、具体的な人数は積算できないということか。

（学校教育課長）三校一体型義務教育学校になったと仮定し、現在の児童生徒数と配置基準から定数の積算は可能である。また、加配については、塩浜学園と比較すれば参考数値が出るかと思われる。

（委員長）次回会議までに資料をお願いしたい。

（委員）子どもたちの教育が良くなること、教職員が良かったと感じる学校環境づくりをするための議論をしていきたい。

（委員長）現状の学校の様子など、各校長から意見はあるか。

（委員）義務教育学校の教職員や保護者の生の声を聞いてみたいが可能か。

（教育長）塩浜学園に確認することは可能。また、教職員について、教職員は配置された学校で最善を尽くすのが使命であり、今の学校環境についても「与えられた環境で頑張ります」としか言えないものだと思うので、教育課程などについて意見を聞いてみたいと思う。

（副委員長）規模が小さい学校では教職員数もギリギリで、教頭が授業に出るとも聞く。一体型になり大きくなれば、そこの余裕も出来るのでは。

（学校教育課長）学級数が増えるわけではないので数的には変わらないと思うが、一つの敷地内での教職員数が増え、人の手が増えることによる手厚さはあると思う。

現状の布小も南小も担任を持たない職員は一人しかおらず、誰かが休むと負担が大きい。布中は担任を持たない職員が６人ほどいるため、義務教育学校として一体型になれば、後期課程の職員が前期課程の児童の面倒を見ることができ、手厚さが増す。

（委員）布小と布中は隣接しており、小学生と中学生の交流が多い。登校中の小学生と部活でランニングしている中学生が声を掛け合い、お喋りしている姿を見ると、同じ敷地内で小中学生が一緒に生活するのは良いことだと思う。

授業面では小学校中学校それぞれ子どもたちの学力を上げようと努力しているが、中学校からみて小学校の授業を確認したいとき、布中から隣の布小へ行くだけでも中々時間がとれない。小学校の授業内容を１時間みるためには、中学での授業を２～３時間空ける必要があり、教員から希望が出ているが実現が難しい。

同じ敷地内にあれば、ちょっと授業を見に行けたり、教員同士の情報共有もできる。指導課の説明にもあったが、小学校から中学校まで通してどのような力をつけるのか、どこでつまずいてしまうのかが分かれば子供たちの学習もしやすくなる。また、中学から不登校が増えるが、その時に小学校で教わった先生が近くにいて話ができれば、不登校になりそうな子供の居場所になったり安心して通えたりということもあるのではないかと思っている。

（委員）これまで様々な規模の学校をみてきたが、適正規模という観点で考えると小さい学校なりのメリットもあるが、デメリットも多い。多様な考え方に触れる機会が少ない、行事での集団活動に制約がある、クラス替えがなく人間関係が固定化されるなど。大きい学校もデメリットがあるが、大きい集団は班分けなどの工夫で小さくすることができる。しかし、小さいものを大きくすることは出来ないため、ある程度適正規模は必要だと思う。

（副委員長）塩浜学園では小学校と中学校の教員が同じ職員室にいた。小学校から中学校への接続について考えたとき、小学校高学年から中学校進学時点の基礎学力は大事だと思うが、あらかじめ中学校の教員が小学校の様子を見られれば、子どもに合わせたきめ細かい指導ができると思う。塩浜学園は５、６、７年生がミドル学年としてまとまっており、小学校から中学校へあがる段階に力が入っているのだと思う。小中一貫教育であれば、一体型が望ましいのではないか。

（委員）布小、南小の１年生は今何人か。

（回答）布小30人、南小20人。

（委員）生徒数が確保できなくなっており、現実問題として一体化にならざるを得ないのではないか。一体型なら、中学校の専門的な先生が小学校の児童を教えたり、１クラスを複数人でみる余裕も出てくるのでは。複数学級による競争も学力向上に必要だと思う。

（委員長）布小30人、南小20人なら、合わせると25人２クラスになるので少人数対応としても指導しやすさはあるのではないか。

（委員）今後検討していく中で、検討項目や疑問・課題点を洗い出した方がよいのではないか。各委員から意見を集約し、それについて意見交換していきたい。

（委員）小中一貫校や義務教育学校については分からないことも多く、メリットだけ聞いていると良いものだと思うが、デメリットについても考える必要がある。

（委員長）メリットだけではなくデメリットについても考え、改善案なりしっかりした説明が必要である。

（委員）三校一体型一貫校になるとして、それをどう思いますか？と聞かれても回答は難しい。塩浜学園の事例では学区外からの進学も多いため、実際に学区外から進学する理由などが分かれば一体型の魅力も分かるのではないか。

（委員）子どものクラスでも算数が苦手な子が多く、校長も手伝って算数を教えていると聞く。基礎学力を上げるためにも、学校規模が大きい方が加配教員も増えてメリットがあると感じる。

（委員長）自身が小学校をみている中でも算数のつまずきは多い。小中一体型一貫校になることで学習面のメリットはあるのではと思う。

（委員）他事例の視察も行いたい。

（事務局）検討する。

（教育長）小中一貫教育の他事例視察もあるが、現状の三校の様子も見ていただきたいと考えている。第３回以降の会議ではより本格的な協議に入っていただくが、そこでは観点を絞っての協議にしたい。

教員数について、各学級に担任が１人ずつと校長教頭に加え、小学校増置教員がつくことになっている。布小南小の規模では増置教員は一人で、音楽専科や教務主任となるが、誰かが休むとそこに入らなければいけない。加配で入る職員も、布小と南小では0.5人とされている（事務局注：0.5人とは勤務時間が半分の非常勤職員を雇用するということ）。その中で進めるということで、市としてもスクールサポート教員といった市で雇用する職員を入れてなるべく手厚くなるようしているが、小規模校だとそれも少なくなってしまうのが現状である。

（委員）音楽専科と特別支援学級の担任を兼務しているとも聞いた。しかし、学期途中で多忙のため、他の学年の教員が音楽の授業を担当するようになったらしく、これは厳しい状況なのではないか。

（学校教育課長）県の基準では、小学校では各学年2学級の計12学級以上であれば担任以外の教員が２人つくことになっており、教務主任と音楽専科として配置ができる。12学級を下回ると委員から話のあった状態のように、教務主任や音楽専科をしながら担任をもつことになってしまう。市費でスクールサポート教員を入れたり、各校長と相談したりしながら職員配置の工夫をしているが厳しい現状である。合わさることによる人数増については、教職員配置の視点もあるのでご意見をいただきたい。

（委員長）今後は、授業、教職員、施設など項目を議題の柱として検討していく方針で進めていきたい。事務局にて項目の洗い出しと集約をお願いする。

６　事務連絡

７　閉会

（省略）

（以上）

次回開催は３月を予定しています。